

雨ふり

泉鏡花作

全一章

一瀬を低い瀧に颯と碎いて、爽かに落ちて流るゝ、
桂川の溪流を、石畳で堰いた水の上を堰の其の半ば
まで、足駄穿で渡つて出て、貸浴衣の尻からげ。梢
は三階の高樓の屋根を抜き、枝は川の半ばへ差蔽う
た槻の下に、片手に番傘を、トンと肩に持たせなが
ら、片手釣で軽く岩魚を釣つて居る浴客の姿が見え
る。
片足は、水の落口に瀬を搦めて、蘆のそよぐが如
く、片足は鷺の眠つたやうに見える。・・・堰
の上の水は一際青く澄んで静である。其處には山椿
の花片が、此のあたり水中の岩を飛び岩を飛び、胸
毛の黄色な鶺鴒の雌鳥が含みこぼした口紅のやうに
浮く。

雨はしと／＼と降るのである。上流の雨は、うつ
くしき雫を描き、下流は繁吹に成つて散る。しと／

と雨が降つて居る。

このくらゐの雨は、竹の子笠に及ぶものかと、半纏ばかりの頬被で、釣棹を、刺いて見しよ、と腰にきめた村男が、山笹に七八尾、銀色の岩魚を徹したのを、得意顔にぶら下げつゝ、若葉の陰を岸づたひに、上流の一本橋の方からすた／＼と跣足で来た。が、折からのたそがれに、瀬は白し、氣を籠めて、くる／＼くる、カカカと音を調ぶる、瀧の下なる河鹿の聲に、歩を留めると、其處の釣人を、じろりと見遣つて、空しい渠の腰つきと、我が獲ものを見較べながら、かたまけると云ふ笑方の、半面大ニヤリにニヤリとして、岩魚を一振、ひらめかして、また、すた／＼。・・・で、すこし岸をさがつた處で、中流へ掛渡した歩板を渡ると、其處に木小屋の柱ばかり、圍の疎い「獨鈷の湯。」「がある。――屋根を葺いても、板を打つても、一雨強くなつて、水嵩が増すと、一堪りもなく押流すさうで、いつも然うしたあからさまな體だと云ふ。――

半纏着は、水の浅い石を起して、山笹をひつたり

挟んで、細流に岩魚を預けた。澆刺と言ふのは此であらう。水は尾鰭を泳がせて岩に走る。そのまゝ、すぼりと裸體に成つた。半纏を脱いだあとで、頬かぶりを取つて、ぶらりと提げると、すぐに湯氣と、もに白い肩、圓い腰の間を分けて、一個、忽ち、ぶくりと浮いた茶色の頭と成つて、そしてばちや／＼と湯を澆ねた。

時に、其の一名、弘法の湯の露呈なことは、白膏の群像とまでは行かないが、巡礼禮、道者、村の娘、嬰兒を抱いた乳も浮く・・・在の女房も入交りで、下積の西洋畫を川で洗濯する風情がある。

この共同湯の向う傍は、淵のやうにまた水が青い。對岸の湯宿の石垣に咲いた、枝も撓な山吹が、ほのかに影を淀まして、雨は細く降つて居る。湯氣が霞の凝つたやうにたなびいて、人々の裸像は時ならぬ朧月夜の影を描いた。

肝心な事を言忘れた。・・・木戸錢はおろか、遠方から故々汽車賃を出して、お運びに成つて、こ

れを御覽なさらうとする道徳家、信心者があれば、
遮つてお留め申す。――如何となれば、座敷の脇掛
窓や、欄干から、かゝる光景の見られるのは、年に
唯一兩度ださうである。時候と、時と、光線の、微
妙な配合によつて、しかも、品行の方正なるものに
のみあらはるゝ幻影だと、宿の風呂番の（信さん）
が言つた。――案ずるに、此は修善寺の温泉に於け
る、河鹿が吐く蜃氣樓であるらしい。かた／＼、そ
んな事はあるまいけれども、獨鈷の湯の恁る状態を
あてにして、お出かけに成つては不可い。

ゴウーンと雨に籠つて、修禪寺の暮六つの鐘が、
かしらを打つと、それ、ふツと皆消えた。……
むく／＼と湯氣ばかり。堰に釣をする、番傘の客も、
椶に暗くなつて、もう見えぬ。

葉末の電燈が零する。

女中が廊下を、ばた／＼と膳を運んで来た。有難
い、一銚子。床の櫻もしつとりと盛である。

が、取立てゝ春雨のこの夕景色を話さうとするの
が趣意ではない。今度の修善寺ゆきには、お土産話

が一つある。

何事も、しかし、其の的に打撞るまでには、弓と云へども道中がある。酔つて言ふのではないけれども、ひよろ／＼矢の夜汽車の状から、御一覽を願ふとしよう。

先以て、修善寺へ行くのに夜汽車は可笑い。其處に仔細がある。たま／＼の旅行だし、静岡まで行程を伸して、都合で、あれから久能へ廻つて、龍華寺――一方ならず、私のつたない作を思つてくれた齋藤信策（野の人。）さんの墓がある――其處へ参詣して、蘇鐵の中の富士も見よう。それから清水港を通つて、江尻へ出ると、もう大分以前に成るが、神田の叔父と一所の時、わざとハイカラの旅館を逃げて、道中繪のやうな海道筋、町屋の中に、これが昔の本陣だと叔父が言つただゞつ廣い中土間を奥へ抜けた小座敷で、お平についた長芋の厚切も、大鮪の刺身の新しさも覚えて居る。「いま通つて来たあの土間の處に腰を掛けてな、草鞋で一飯をしたものよ。爐端で挨拶をした、面長な媪さんを見た

か。・・・其の時は、島田鬮で悩ませたぜ。
と、手酌で引かけながら叔父が言つた。古い旅籠も可懐い。・・・

それとも、静岡から、すぐに江尻へ引返して、三保の松原へ飛込んで、天人に見参し、きものを欲しがる連の女に、羽衣、瓔珞を拜ませて、小濱や金紗のだらしなさを思知らさう、ついでに萬葉の印を結んで、山邊の赤人を、桃の花の霞に顯はし、それ百人一首の三枚めだ。・・・田子の浦に打出で、見れば白妙のーぢやあない、・・・田子の浦ゆ、さ、打出で、見れば眞白にぞ、だと、ふだん亭主を彌次喜多に扱ふ女に、學問のある處を見せてやらう。たゞしどつち道資本が掛る。

湯治を幾日、往復の旅錢と、切詰めた懐中だし、あひ成りませう事ならば、其の日のうちに修善寺まで引返して、一旅籠かすりたい。名案はないかな、と字の如く案ずると・・・あゝ、今にして思當つた。人間朝起をしなけりや不可い。東京驛を一番で立てば、無理にも右様の計略の行はれない事もな

さうのだが、籠城難儀に及んだ處で、夜討は眞似ても、朝がけの出来ない愚將である。碎いて言へば、夜逃は得手でも、朝旅の出来ない野郎である。あけ方の三時に起きて、たきたての御飯を掻込んで、四時に東京驛などへは思ひも寄らない。――名案はなかな――こへ、下町の姉さんで、つい此間まで、震災のために逃げて居た……元來、静岡には親戚があつて、地の理に明かな、粹な軍師が顯はれた。

「……九時五十分かの終汽車で、東京を出るんです。……静岡へ、丁ど、夜あけに着きますから。其だと、どつちを見ぶつしても、其の日のうちに修善寺へ參られますよ。」

妙。

奇なる哉、更に一時間いくらと言ふ……三保の天女の羽衣ならねど、身にお寶のかゝる其の姉さんが、世話になつた禮かた／＼、親類へ用たしもしたいから、お差支へなくば御一所に、――お差支

へ？・・・おつしやるもんだ！ 至極結構。で、
たゞ匆で連出す算段。あゝ、紳士、客人には、ある
まじき不料簡を、うまれながらにして喜多八の性を
うけたしがなさに、忝えと、安敵のやうな笑を漏ら
した。

處で、その、お差支のなさを裏がきするため、豫
て知合ではあるし、綴蓋の喜多の家内が、折からき
れめの鯉節をイへ買出しに行くついでに、その姉さ
んの家へ立寄つて、同行三人の日取をきめた。

「一寸、ふでを休めて、階子段へ起つて、したの
長火鉢を呼んで曰く、

「・・・それ、何ーあの、みやげに持つて
行つた勘茂の半ぺんは幾つだつけ。」

「だしぬけに何です。・・・五つ。」

「五つかー私はまた二つかと思つた。」

「唯た二つ・・・」

「だつて彼家は二人きりだからさ。」 「見つ

ともないことをお言ひなさいな。」

「よし、あひ分つた。」

五つださうで。 其を持參で、取極

めた。 たつたのは、日曜に當つたと思ふ。 念のため、新聞の欄外を横に覗くと、その終列車は糸崎行としてある。 ー糸崎行ーお恥かしいが、私に其の角が分らない。 棚の埃を拂ひながら、地名辭典の索引を繰ると、糸崎と言ふのが越前國と備前國とに二ヶ所ある。 私は東西、いや西北に迷つた。 ー敢て子供衆に告げる。 學校で地理を勉強なさい。 忘れては不可ません。 さて、どつち道、静岡を通るには間違のない汽車だから、人に教を受けないで済ましたが、米原で廻るのか、岡山へ眞直か、自分たちの乗つた汽車の行方を知らない、心細さと言つてはない。 しかも眞夜中の道中である。 箱根、足柄を越す時は、内證で道祖神を拜んだのである。

處で雨だ。 當日は朝のうちから降出して、出掛けの頃は横しぶきに、どつと風さへ加はつた。 天の時は雨ながら、地の理は案内の美人を得たぞと、もう山葵漬を箸の失先で、鯛飯を茶漬にした勢で、つい此頃筋向のニさんに教をうけた、市ヶ谷見附の鳩じると言ふ、やすくて深切なタクシイを飛ばして、

硝子窓に吹つける雨模様も、おもしろく、馬に成つたり駕籠に成つたり、松並木に成つたり、山に成つたり、嘘のないところ、溪河に流れたり、東京驛に着いたのは、まだ三十分ばかり發車に間のある頃であつた。

水を打つたとは此の事、停車場は割に靜で、しつとりと構内一面に濡れて居る。赤帽君に荷物を頼んで、廣い處をずらりと見渡したが、約束の同伴はまだ來て居ない。――大廻りには成るけれど、呉服橋を越した近い處に、バラツクに住んで居る人だから、不斷の落着家さんだし、悠然として、やがて來よう。

「靜岡まで。」

と切符を三枚頼むと、つれを捜してきよろついた様子を案じて、赤帽君は深切であつた。

「三枚？」

「つれが來ます。」

「あゝ、成程。」

突立つて居ては出入りの邪魔にもなりさうだし、

とば口は吹降りふきぶの雨あめが吹込ふきこむから、奥おくへ入はいつて、一度ひとたび覗のぞいた待合まちあひへ憩やすんだが、人ひとを待まちつのに、停車場ステーションで時ときの針はりの進むすすむほど、胸むねのあわたゞしいものはない。「こんな時ときは電話でんわがあるとな。」「もう見みえませう。――こゝにいらつしやい。……私わたしが行いつて見張みはつて居ゐます。」家内かないはまた外そとへ出でて行いつた。少々せう／＼寒さむし、不景氣ふけいきな薄外うすくわいたう套そでの袖そでを貧乏びんぼうゆすりにゆすつて居ゐると、算木さんぎを四角かくに並ならべたやうに、クツシヨンに席せきを取とつて居ゐた客きやくが、そちこちばら／＼と立掛たちかる。……「やあ」と洋杖ステッキをついて留とまつて、中折帽なかをればうを脱とつた人ひとがある。すぐ私わたしと口早くちばやに震災しんさいの見舞みまひを言交いひかした。花月くわげつの平岡權八郎ひらおかしんぱうさんであつた。「どちらへ。」「私わたしは人ひとを一寸ちよつと送おくりますので。」「終汽車しまひぎしやではありませんすまいね。それだと静ざんとして居ゐられない。」「神戸行かうべゆきのです。」「私わたしはそのあとので、静岡しづまかまで行ゆくんですが、糸崎いとさきと言いふのは何處どこでせう。」「さあ……」と言いつた、洋行やうかうがへりの新橋しんばしのちやき／＼も、同じく糸崎いとさきを知らなかつた。

此この一ひとたてが、ぞろ／＼と出でて行ゆくと、些ちと大袈おほげ

袋のやうだが待合室には、あとに私一人と成つた。

それにしても静としては居られない。行

「行と、呼ぶのが、何うやら神戸行を飛越して、糸崎行」と言ふやうに寂しく聞える。急いで出ると、停車場の入口に、こゝにも唯一人、コートの裾を風に颯と吹まどはされながら、袖をしめて、しよぼ濡れたやうに立つて、雨に流るる燈の影も見はぐるまいと立つて居る。

「来ませんねえ。」

「来ないなあ。」

しかし、十時四十八分發には、まだ十分間ある、と見較べると、改札口には、知らん顔で、糸崎行の札が掛つて、改札のお係は、剪で二つばかり制服の胸を叩いて、閑也と濟まして居らるゝ。此を見ると、私は富札がカチンと極つて、一分で千兩とりはぐしたやうに氣抜けがした。が、ぐつたりとしては居られない。改札口の閑地は、もう皆乗込だあとらしい。「確に十分おくれましましたわね、然ういへば、十時五十分とか言つて居なすつたやうでした。――時間

が變つたのかも知れませんが、三や、耳かくしだと時間に間違ひはなからう。ーわがまゝのやうだけれど、銀杏返や圓鬚は不可い。

「だらしはないぜ、馬鹿にして居る。」が、憤つたのでは決してない。一寸の旅でも婦人である。

髪も結つたらうし衣服も着換へたらうし、何かと支度をしたらうし、手荷物をつ積んで、車でこゝへ駈けつけて、のりおくれて、雨の中を歸るのを思ふとあはれである。「五分あれば間にあひませう。」

其處で、別の赤帽君の手透で居るのを一人頼んで、その分の切符を託けた。こゝへ駈けつけるのに人数は恐らくなからう、「あなた氣をつけてね、脊のすわりとした容子のいゝ、人柄な方が見えたら大急ぎで渡して下さい。」畜生、驕らせてやれー女の口で赤帽君に、恚う言つた。

「お氣の毒様です。ーおつれはもう間に合ひません。．．．切符はチツキを入れませんか、代價の割戻しが出来ます。」

もう動き出した汽車の窓に、する／＼と縋りながら、

「お歸途に、二十四ー」と呼んで下さい。その時
お渡し申しますから。」

糸崎行の此の列車は、不思議に絲のやうに細長い。
いまにも遙な石壇へ、面長な、白い顔、棲の細いの
が駈上らうかと且つ危み、且つ苛ち、且つ焦れて、
窓から半身を乗り出して居た私たちに、慇懃に然う
言つてくれた。

ー後日、東京驛へ歸つた時、居合はせた赤帽君に、
その二十四ーのを聞くと、丁ど非番で休みだと
云ふ。用をきいて、ところを尋ねるから、麹町を知
らして歸ると、すぐその翌日、二十四ーの赤帽
君が、わざ／＼山の手の番町まで、「御免下さい
まし。」と丁寧に門をおとづれて、切符代を返し
てくれた。ー此の人ばかりには限らない。静岡で
も、三島でも、赤帽君のそれ／＼は、皆もの優しく
深切であつた。ーお禮を申す。


```

v 6 e r g || ^ a r ^
  c o n v 雨 / F O N T v c o l o r || 5 4 0 ^ t r v ^ a d d || 2 t a
  f o r ^ / F O N T v ^ f o n t || # e f e f " v n o w r a p b
  s i z e || 4 c o l o r || 4 〆 〆 / F O N T ||
  c o l o r || b
  〆 / h e a d v
  b o d y
  b a c k g r o u n d || " . / i
  m g / b b . g i f "
  t e x t || " # 0 0 0 0
  l i n k || " # a l i n
  k || " # f f f 0 0 "
  v l i n k || " # f f f
  〆 / s t y l e v
  W I D T H || 1 0 0 %
  v

```

l a c k v 全一章 (その三) ^ / f o n t v
^ f o n t s i z e 5 c o l o r 11
b l a c k v 泉鏡花作 ^ / f o n t v ^ / t d v ^
/ t r v ^ / c e n t e r v
^ / b v ^ / f o n t v ^ / t d v
^ t d w i d t h 5 0 0 b g c o l o
r 11 # F 2 E F E 1 " v a l i g n 11 t o p
n o w r a p c l a s s 11 z v

浅葱あさぎの暗いくら、クツションも又細長いまたほそなが。室は悠々いゆうくと
すいて居たあ。が、何なんとなく落着かないおちつ。「呼んだよ
ら聞えさうですねきこ。」「呉服橋ごふくばしの上あたりうへで、此こ
のゴーと言ふ奴やつを聞いてるきかも知れないし。」「驛えき
前のタクシイならまへ、品川しながはで間に合あふかも知れませしん
よ。」「そんな事ことはたゞ話はなしだよ。」唯と、バスケ
ットのうへ上に、小取廻ことりまはしに買かつたらしい小形こがたの汽車案きしやあんな
内いが一冊さつある。此これが私わたしたちの近所きんじよにはまだなかつた。
震災後しんさいごは發行はつかうが後おくれるのださうである。

いや、張合はりあひもなく開ひらくうち、「あゝ、品川しながはね。」
カタリと窓まどを開あけて、家内かないが抜出ぬけだしさうに窓まどを覗のぞ

いた。「駄目だよ。」その癖私くせわたしも覗のぞいた。
・ ・ ・ ・ ・ 二人三人、乗組のりくんだのも何處どこへか消え
たやうに、もう寂寞ひっそりする。幕まくを切きつて扉とびらを下おろした。
風かぜは留やんだ。汽車きしゃは糠雨ぬかあめの中なかを陰々いんくとして行ゆく。早はや
く、さみしい事ことは、室内しつないは、一人ひとりも残のこらず長々ながくと成な
つて、毛布まつぶに包つまつて、皆寝みなねて居ある。

東枕ひがしまくらも、西枕にししまくらも、枕まくらしたまゝ何處どこをさして行ゆく
であらう。汽車きしゃ案内あんないの細字さいじを、しかめ面つらで恁かう透すす
と、分わかつた――遙々はる／＼と京大阪きやうおほさか、神戸かうべを通とほる・ ・ ・ ・ ・
越前えちぜんではない、備前びぜん國くに糸崎いとさきである。と、發着はつちやくの驛えきを
静岡しづおかへ戻もどして繰くると、「や、此奴こいつは弱よわつた。」
思おもはず聲こゑを出だして呸つひやいた。静岡しずおか着ちやくは午前こぜんまさに四時じ
なのであつた。いや、串戲じよくだんではない。午前こぜんなどゝ文ぶん
化くわがつたり、朝あさがつたりしては居あられない。此この頃ころ
ではまだ夜半よなかではないか。南洋なんやうから土人どじんが來きても、
夜中よなかに見物けんぶつが出來でくるものか。

「此奴こいつは弱よわつた。」――一件くだんの同伴つれでないつれの案あん
内ないでは、あけ方がたと言いつたのだが、此方こちらに遠とほき慮おもんばかりがな
かつた。その人ひとのゆきゝしたのは震災しんさいのぢきあとだ

から、成程、その頃だと夜があける。――此の時間前後の汽車は、六月、七月だと國府津でもう明るくなる。八月の聲を聞くと、富士驛で、まだ些と待たないと、東の空がしらまない。私は前年、身延へ参つたので知つて居る。

「あの、此の汽車が、京、大阪も通るのだとすると、夜のあけるのは何處らでせうね。」

「時間で見ると、すつかり明るくなるのは、遠江國濱松だ。」

と退屈だし、一つ遠江國と念を入れた。

「横に俾が二挺たゝぬ――彼處ですか。」

「うむ。」とばかりで、一向おもしろくも何ともない。

「其處まで行きますせうよ。――夜中に知らぬ土地ぢやあ心細いんですもの。」

「飴ぢやあるまいし。」

と、愚にもつかぬことをうつかり饒舌つた。静岡まで行くものが、濱松へ線路の伸びよう道理がない。

……しかし無理もない。こんな事を言つたの

は恰も箱根の山中で、丁ど丑三と言ふ時刻であつた。あとで聞くと、此の夜汽車が、箱根の隧道を潜つて鐵橋を渡る刻限には、内に留守をした女中が、女主人のためにお題目を稱へると言ふ約束だつたのださうである。

「何の眞似だい。」

「地震で危いんですもの。」

「地震は去年だぜ、ばかな。」

然りとは雖も、その志、むしろにあらざ捲くべからず、石にあらざ、轉すべからず。．．．ありがたい。いや、禁句だ。こんな處で石が轉んで堪るものか。たとへにも山が崩るゝとか言ふ。其の山が崩れたので、當時大地震の觸頭と云つた場所の、剩へ此の四五日、琅の如き蘆ノ湖の水面が風もなきに浪を立てると、うはさした機であつたから。

山北、山北。――鮎の鮓は――賣切れ。．．．お茶も。――もうない。それも侘しかつた。

が、家を出る時から、こゝでこそと思つた。――

實は其の以前に、小山内さんが一寸歸京で、同行だつた御容色よしの同夫人、とめ子さんがお心入の、大阪遠来の銘酒、白鷹の然も黒松を、四合罎に取り分けて、バスケットとも言はず外套にあたゝめたのを取出して、所帯持は苦しくつてもこゝらが重寶の、おかゝのでんぶの蓋ものを開けて、さあ、飲むぞ！

トンネルの暗闇に彗星でも出て見ると、クツシヨンに胡坐で、湯呑につぐと、ぶんとにほふ、と、かなで書けばおなじだが、其のぶんが、腥いやうな、すえたやうな、どろりと腐つた、青い、黄色い、何とも言へない悪臭さよ。――飛でもないこと、・・・酒ではない。

Λ / f o n t v Λ / t d v Λ / t r v Λ / t a b l
e v

```

^ / h t m l v
^ / b o d y v
    f u r _ r _ 4 . h t m l " v その四 ^ / A v
    " ^ / F O N T v ^ A H R E F " a m e
    ^ F O N T C O L O R " # 6 6 6 9 9
    f u r _ r _ 3 . h t m l " v その三 ^ / A v
    " ^ / F O N T v ^ A H R E F " a m e
    ^ F O N T C O L O R " # 6 6 6 9 9
    f u r _ r _ 2 . h t m l " v その二 ^ / A v
    " ^ / F O N T v ^ A H R E F " a m e
    ^ F O N T C O L O R " # 0 0 0 0 0
    f u r _ r _ 1 . h t m l " v その一 ^ / A v
    " ^ / F O N T v ^ A H R E F " a m e
    ^ F O N T C O L O R " # 6 6 6 9 9
    i n d e x . h t m l " v 表紙 ^ / A v
    " ^ / F O N T v ^ A H R E F " . . /
    ^ F O N T C O L O R " # 0 0 0 0 0
v
e f t .. 6 p x " v ^ F O N T S I Z E " 2 "
^ D I V S T Y L E " m a r g i n . l

```

* * * * * 4

```
^ h t m l v
^ h e a d v
^ t i t l e v 泉鏡花作・『雨ふり』 全一章（そ
の四） 泉鏡花文庫『鏡花花鏡』の藏書 ^ / t i t
l e v
^ s t y l e t y p e = " t e x t / c s s " v
^ ! ' '
b o d y , t d , d i v { f o n t - s i z e :
1 8 p x }
a { c o l o r : n a v y }
. z { l i n e - h e i g h t : 2 0 0 % }
. ' v
^ / s t y l e v
^ / h e a d v
^ b o d y b a c k g r o u n d = " . / i
m g / b b . g i f " t e x t = "# 0 0 0 0
```


^ / b v ^ / f o n t v ^ / t d v
/ t r v ^ / c e n t e r v
b l a c k v 泉鏡花作 ^ / f o n t v ^ / t d v ^
^ f o n t s i z e || 5 c o l o r ||
l a c k v 全一章 (その四) ^ / f o n t v
v ^ f o n t s i z e || 4 c o l o r || b
6 c o l o r || p u r p l e v 凧 ^ / F O N T
e e n v 雨 ^ / F O N T v ^ f o n t s i z e ||
r v ^ f o n t s i z e || 6 c o l o r || g r
g c o l o r || # e f e f e " v ^ c e n t e
|| 5 4 0 h e i g h t || 5 0 n o w r a p b
^ t r v ^ t d c o l s p a n || 2 w i d t h
a d d i n g || 1 0 v
r || 2 c e l l s p a c i n g || 5 c e l l p
^ t a b l e w i d t h || 5 6 7 b o r d e
^ H R W I D T H || 1 0 0 % v
0 0 0 " v
k || # f f f 0 0 " v l i n k || # f f f
0 0 " l i n k || # f f f f " a l i n

^ t d w i d t h || 5 0 0 b g c o i o
r || " # F 2 E F E 1 " v a l i g n || t o p
n o w r a p c l a s s || z v

一體、散々の不首尾たら／＼、前世の業でゞもあ
るやうで、申すも憚つて控へたが、もう黙つては居
られない。たしか横濱あたりであつたらうと思
ふ。．．．寂しいにつけ、陰氣につけ、随所停
車場の燈は、夜汽車の窓の、月でも花でもあるもの
を――心あての川崎、神奈川あたりさへ、一寸の間
だけ、汽車も留つたやうに思ふまでゞ、それらしい
燈影は映らぬ。汽車はたゞ、曠野の暗夜を時々けつ
まづくやうに慌しく過ぎた。あとで、あゝ、あれが
横濱だつたのかと思ふ處も、雨に濡れしよびれた棒
杭の如く夜目に映つた。確に驛の名を認めたのは最
う國府津だつたのである。いつもは大船で座を直し
て、かなたに逗子の巖山に、湘南の海の渚におはし
ます、岩殿の觀世音に禮し参らす習であるの
に。．．．それも本意なさの一つであつた。が、
あらためて祈念した。やうなわけで、其の何の邊で
あつたらう。見上げるやうな入道が、のろりと室へ

入つて来た。づんぐり肥つたが、年紀は六十ばかり。
ト頭から頬へ縦横に繻帯を掛けて居る。片頬が然ら
でも大面の面を、別に一面顔を横に附着けたやうに、
だぶりと膨れて、咽喉の下まで垂下つて、はち切れ
さうで、ぶよ／＼して、わづかに目と、鼻。繻帯を
覗いた唇が、上下にべろんと開いて、どろりとして
居る。動く、たら／＼と早や膿の垂れさうなの
がー丁ど明いて居たー私たちの鄰席へどろ／＼
と崩れ掛つた。オペラバッグを提げて、飛模様の派
手な小袖に、紫が羽織を着た、十八九の若い女が、
引續いて、黙つて其の傍へ腰を掛ける。
と言ふうちに、その面二つある病人の、その臭氣
と言つたらぬ。

「お察しあれ、知己の方々。ー私 は 下駄を引ずつ
て横飛びに逃出した。」

「あゝ、彼方があんなに空いて居る。」
と小戻りして、及腰に、引こ抜くやうにバスケット
を掴んで、慌てゝ、這つて、片足で、怪飛んだ下
駄を捜して逃げた。氣の毒さうな顔をしたが、女も

そツと立つて来る。

此の様子を、間近に視ながら、毒のある目も見向
けず、呪詛らしき咳もしないで、ずべりと窓に仰向
いて、病の顔の、泥濘から上げた石臼ほどの重い
を、ぢつと支へて居る病人は奇特である。

いや特勝である。且以て、たふとくさへあつた。

面當がましく氣の毒らしい、我勝手の凡夫の淺ま
しさに、人知れず、面を合はせて、私たちは恥入
つた。が、薬王品を誦しつゝも、鯖くつた法師の口
は臭いもの。其の臭さと云つては、昇降口の其方の
端から、洗面所を盾にした、いま此方の端まで、む
ツと鼻を衝いて臭つて来る。番町が、又大袈裟な、
と第一近所で笑ふだらうが、いや、眞個だと思つて
下さい。のちに、やがて、二時を過ぎ、三時になり、
彼方此方で一人起き、二人さめると、起きたのが、
覺めたのが、いづれもきよとんとして四邊を見なが
ら、皆申合はせたやうに、ハンケチで口を押へて、
げツツと咽せる。然もありなん。大入道の眞向に寢
て居た男は、たわいなく寢ながら、うゝと時々苦し

さうに麿うなされた。スチームがまだ通とほつて居ゐる。しめ切きつた戸との外そとは蒸むすやうな糠雨ぬかあめだ。臭くさくないはずはない。

女房にようぼうでは、まるで年としが違ちがふ。娘むすめか、それとも因果いんぐわ何とか言いふ妾めかけであらうか——何なににしる、私わたしは、其その耳みみかくしであつたのを感じかんじする。……島田しまだ鬚すでは遣切やりきれない。

もう箱根はこねから駈落かけおちだ。

二人分にんぶん、二枚まいの戸とを、一齊いつしよにスツと開ひらくと、岩膚いはだの雨あめは玉清水たましみづの滴したる如ごとく、溪河たにだはの響ひびきに煙けむりを洗あらつて、酒さけの薰かをりが芬ぶんと立たつた。手てづから之これをおくられた小山をさな内夫人いふじんの袖そでの香かも添そふ。

二三杯はいやつつけた。

阿部川あべがはと言いへば、きなこ餅もちとばかり心得こころえ、「贊さん成せい」とさきばしつて、大船おほふなのサンドヰツチ、國府こふ津つの鯛飯たひめし、山北やまきたの鮎あゆの鮓すしと、そればつかりを當あてにして、皆買みなかつて食たべるつもり、足柄あしがらに縁えんのありさうな山やまのかみは、おかゝのでんぶを詰つまらなさうに覗のぞき

ながら、バスケットに凭れて弱つてゐ居る。

「なまじ所帯持だなぞと思ふから慾が出ます。かの彌次郎の詠める……可いかい——飯もまだ食はず、ぬまずを打過ぎてひもじき原の宿につきけりと、もう——追つゝけ沼津だ。何事も彌次喜多と思へば濟むぜ。」

と、とのさまは今の二合で、大分御機嫌。ストンと、いや、床が柔軟いから、ストンでない、スボンと寝て、肱枕で、阪地到来の芳酒の酔だけに、地唄とやらを口誦む。

お前の袖と、わしが袖、合せて、

——何とか、何の袖。……たゞし節なし、忘れた處はうる抜きで、章句を口のうちに、唯引張る。

露地の細道、駒下駄で——

南無三寶、魔が魅した。ぶく／＼のし／＼と海坊

主。がーあゝ、之を元來懸念した。道其の衝にあ
たつたり。W・Cへ通りがかりに、上から蔽かぶさ
るやうに來た時は、角のあーるだけ、青鬼の方がま
しだと思つた。

アツといつて、むつくと起き、外套を頭から、硝
子戸へひつたりと顔をつけた。ー之だと、暗夜の
野も山も、朦朧として孤家の灯も透いて見え
る。．．．．．一つお覺え遊ばしても、年内の御重
寶。

外套の裡から小さな聲で、
「．．．．．返つたかい。」
「もう、前刻。」
私 は耳まで壓へて居た。

鱧の沼津をやがて過ぎて、富士驛で、人員は、は
じめて動いた。

それもたゞ五六人。病人が起つた。あとへ紫がつ
いて下りたのである。．．．．．鱧の沼津と言つた。

雨ふりだし、まだ眞暗だから遠慮をしたが、こゝで紫の富士驛と言ひたい、――その若い一女が下りた。

さては身延へ參詣をするのであつたか。遙拝しつゝ、私たちは、今さらながら其の二人を、涙ぐましく見送つた。紫は一度宙で消えつゝ、橋を越えた改札口へ、ならんで入道の手を曳くやうにして、微な電燈に映つた姿は、耳かくしも、其のまゝ、さげ髪の、黒髪長く臆たけてさへ見えた。

下山の時の面影は、富士川の清き瀬に、白蓮華の花びらにも似られよとて、切に本腹を祈つたのである。

興津の浪の調が響いた。

【完】